制服から考える多様性

小　五

新年度になり、真新しい制服を着て登校するお兄さんやお姉さんを見ると思い出すニュースがあります。スカートしかなかった都内の伝統ある女子校の制服にスラックスが加わり、選べるようになったというニュースで、少し前にテレビで見た記おくがあります。

近所の人や姉の受験を通して、制服も学校選びの一つの選たくしで、制服が可愛くて着たいから志望校にするというケースがあるということを聞いたことがあります。だから、そのニュースを見たときは、制服でもオシャレを楽しみたいとか、その日の活動に合わせた格好にしたいといったようなニーズをくみとり、選たくしを増やしたのだと思いました。わたし自身もズボンで登校することが多く、動きやすいし、防寒対さくにもなるので好んではいており、このような対応が広がったらありがたいなと思っていました。

たまたまそのような話を母にしたところ、思いがけない言葉が返ってきました。それは女子の中にもスカートをはくことが精神的に苦つうだと感じる人がいて、そのような人たちに配りょした対応でもあるということでした。女子の制服にスラックスを取り入れることには、もちろんわたしが思ったような防寒対さくや自転車通学への配りょもあり、それ以外にもちかんひ害の防止などもあるようですが、最大の

目的は、スカートをはくのを苦つうと感じながら学校生活を送っている生徒たちの声にこたえることだということを初めて知りました。

「LGBTQ」とか「トランスジェンダー」という言葉は耳にしたことがあり、その中にこころとからだの性別が一致（いっち）していない人がいることは知っていました。「そのような人とも分けへだてなく接していきましょう」「差別やへん見をなくしましょう」という取り組みが世の中でなされていて、自分自身はできていると思っていました。しかし、そのニュースと母から教わったことを聞いて、自分は今まで何も考えていなかったのだと反省しました。改めて世の中の取り組みに目を向けてみるとバリアフリートイレが増えていることも、このような人たちへの配りょだと思います。身体の不自由な人やお年寄り、小さい子ども連れの親子が利用するのはもちろんですが、男子トイレや女子トイレに入りづらい人の利用も想定されているものだと感じました。

わたしはこれまで、自分はみんなと平等に接することができていると自信をもって生きてきました。しかし、自分が意識していなかったり、気付いていなかったりするところでだれかに苦つうをあたえていることがあるのだ、ということを知りました。大切なのは、その人の気持ちになって想像してみること、様々な人の声に耳をかたむけることだと思います。当たり前で、何ら

違和感（いわかん）をもたないものの中にもだれかに苦つうをあたえているものがあるかもしれないという目で見て、みんながくらしやすい社会の実現に向けて改ぜんしていきたいと思います。